續少年頌

完

911.3
ツ

都築の系

立ちもとゝ会津の向の島に住ける根を尋
ねるに武蔵の都築の系の後裔
なり　世に聞こゆる　の二聖草も今も
野のふかき友達　都の何某　判
官なる人をもかたらひて　家を東に移す
つゝの元原の中に　支の柳　以前
お記月の柳に筆をまゝ

一柳軒不卜

一番　芹

左　持

右　拳白

二番　白魚

左　持

右　勝

三番　梅

左

右　勝

三日月を梅にそへたる　不角

暗香浮動月黄昏梅の精神形容を申　左も悪敷くあれ共他に書付申さる

[illegible]

四番　立加木

左　持

[illegible]ふ立加木　嵯水

右

[illegible]立加木に置の高伸　扇白

左孤特見る案色之右ふけ[illegible]

[illegible]伸之仕[illegible]白つふ[illegible]紙持[illegible]

五番　蝶

左　勝

いつとなく[illegible]子に[illegible]　渓石

右

松　枝に[illegible]　委秋

松枝の[illegible]左の[illegible]

六番　燕

左　持

落ちつり滝の水のもと苔すれ　一排

右

秋かぜ中とてもを川苔ぶし　心水

輕業双方類なしてを流左右猶右と

なし

七番　藤花

左　勝

ふる井戸の藤のさく数水の環　仙花

右

をこかつ〳〵ちりそと咲て藤のもと　雨国

左中七夕まつりの歌の続き唱て高〳〵かな年

行ふ歌ふ〳〵て自然の伊流あり〳〵右又

ふるき所を得〳〵り紙も其水の環以さくらて猶

八番　柳

左

大隅の力ゑ四中ゑ柳〳〵ふ　野足

右　勝

鶯の初ふり蔵ゑ多ふ柳〳〵れ　琴風

右春遠三日月の初つゝの句を上ニ置て此句

第二ニ不蔵左も又要ニハ所侍〳〵侍〳〵

左右ゑ多きゝ和

九番　雲雀

左　勝

[illegible]　魚兒

右

[illegible]　五位

[illegible]

十番　赤凡

左　持

[illegible]　[illegible]

右

[illegible]　紅味

左右[illegible]

十一番　赤の芽

左　持

[illegible]　朱絃

右

[illegible]　鴟白

右[illegible]

何んさかく不分甲乙

十二番　櫻

左　持　具角

櫻ちる孫生ありいふもかなし

右

ちりたるや櫻峯よりも山櫻　不卜

左右とも生田の森も鳥もはつきと
ふかくるも咋しも筆をさし置のく
古き時の友不卜子千句ふる書の句合を編む
しきも判をもかゝむ狂句ろしくはいろ他の

白櫻ときかるし左畫右編筆ふ事をなかなかや
是風雅のおもひあらそひはなきせん世々是非
を辭人櫻是非の内を出ぬ判々加へ
しかるべきと人又あん急判の判も判
ちりとや丁卯のみて

素堂書

流るゝ杜丹を落つ
隅田川給ひ縮乏
移り行の世して
それ人と定む此千柏

一番

左　持　卯の花

卯のさや里の見えすく朝朗　露沾

右

黄鳥の聲や鶯を比叡山　不卜

左は玉鉾の道行人も所のものの白妙なる
行里を見かへて足を止む一枝溝洲の蹤籬の
家色自然に隠れて年経る右は時鳥の
移所老声に呼てと清氏の女の古歌に心
もとなくも思て自保を模陵の名を紀貫

二番　麥

左　持

ひとつ面に牛飼ふ麥野　松風

右

麥野の面に牛飼ふ麥野の暮風　調物

麥野の面に牛飼ふ作意詞あり
奥歌あり左はまのふの秋風と見る所ホ
意味あり左持

三番　筆

左　持

頭根ふり筆ふるく庭の柳　全筆

右

ふる井戸に笛吹く風且の柳　不論

筆の物とふるに奥有庭も見ふ所也

又住すまゝ〳〵古井戸の中より生出るふぶき
もありて軍に付ると見共左の宗時に以て〳〵か
おとりなる所も見と付ふ

四番　田植

左

蔦の葉ふる亀　押〳〵ふる田植哉　立出

右　勝

折〳〵に咲くゝ面見ん田植すれ　兼吉

張世子ら雷生の田あり引連こゝと詠すること
思もて詠し　左も一位常かゝぬ所あり共右の
句の詠ちゝやゝ色乙見を引方よかりぬ

五番　百合

左　勝

喰殺す厩の内の早百合哉　一抽

右

五月雨に二見ます〳〵百合のたゞ　攸笠

左こゝに二俗有良と喰殺すゝと草刈おのこ仏
かくゝゝなる牛の所情に優して抽こ右晴間ふ
ゆ六ゝ山猫〳〵なるゝなるもと軍に成の〳〵左の百合
色ほ〳〵

六番　蛇尾

左　持

紫尾を泪おとせる古うとも　扇雪

右

蝶一つ見つけぬ紫尾の茂うれ　西国

古墳の紫尾の面白き紅葉蝶一つ
見つけぬもとこそ一つ蝶を
かくもさとる

七番　夕良

左　持

夕良中に花を落とす多ふもの形　去来

右

畳良の中に小草屋毛長　調義

夕良に花を落とす多ふもの形
畳良に実とる化ある花とふ果
草屋毛中に小草屋毛長

八番　蛍

左　勝

一節煙　蛍中に小蛍　立嵩

右

落ちぬ八ちるを手の蛍　涼石

左の句煙中に小一節の煙遠去て

[illegible]品高――右皆れき舟の[illegible]孫[illegible]左
[illegible]

九番　虻

左　特

[illegible]伽稱[illegible]　[illegible]　唆水

右

[illegible]　心水

[illegible]

十番　蓮

左

[illegible]　勇招

右

[illegible]　野[illegible]

[illegible]

十一番　涼

左　勝

舩こゝやて、ゝ、ゝ——ゐ碁をゐ陳ゝ式　不角

右

さかゐ——ゆ板ゐ十ゐゐゐ夕十ゝゝ　琴風

左いゝゐゐ蔵蔵ゝ舟ゝゝやて行日の碁ゐ日者を
高ゐゝゝゐゝゝゝ——のゆゝゝゐゐゝを陳て見をゝ行
夏ゆたゐゝ右い禅ゝゝ才ゝ性ゐ数程の姿
ゝゐ板ゐゐゐ十ゐゐゐゐ諸ゝゝかゐ——の五手ま
能墨をゐゐをゝも左の仰海ゐ——いおゝりて
見ゝ行る

十二番　清水

左　特

帰陳——て墨ゝゐ人の清ゐ式　風ゐ

右

ゐゝ越ゐゐ又多ゐ南る清ゐ式　嵐ゐ

左いゝゝゝ必所ゐゐをゐゝゐ句ゝ事ゐゐの
ゐ人の右ゐ半ゐゐ、ゐ水鳥跡を留ゝ数め
ゐゐ長ゐ竜ゐゝゝ必ゝゝゐ——右い立戻ゝゝゝ
ゐ清ゐの誉をゐ——ゐをゐ壮ゐ詠を
限ゐゐ能時ゝ書ゐゝゝ

調和

番　ゐゐ秋

左　勝

[illegible]の公[illegible]素[illegible]
[illegible]
五明文　月中陰を感ずる好色の内　長角

右

安[illegible]の[illegible]ふ[illegible]ぬ縄[illegible]　嵐雪

左ハ琪樹西風枕簟秋とうたへ秋思の情り自後を新涼至京國中竹婦人の竜[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]色感る字もれ[illegible]かれ右ハ眼ニハさやかに見え紙ともに思ひやるまて風動まぬ縄すゝ[illegible]寂寞[illegible]凄て切切とうたへ肌骨に通りて耳ふすまと此番秋の巻頭とは色ハ左に勝を分る事ニ有り

二番　露

左

[illegible]　古川

右　勝

[illegible]　[illegible]

両句共に露を能[illegible]句[illegible]ふ[illegible]右の野[illegible]全[illegible]詩[illegible]一句千里の意有仍[illegible]左ハ判者の[illegible]

三番　稲妻

左　勝

稲妻[illegible]

右

稲書手かくさぬ僧の舎ずか　不角

左稲書のすがすがしき光を放つて歌の体ひとしれず
良けれども歌の中に発と思ふ作
者のこゝ新のふこゝろえありてもこゝろみるべし
なり　かゝる所なるべし　右も彼庶の
上に水海をこゝろもこゝろみるとこゝろをこゝ
屋思ひ始めて僧の居りて稲書のとりあひ
世の常のさまと見えあり左ふなり

四番　鶯

左

若間也　風ふかぬ若草の色　蚊足

右　勝

花　春雨　降ふる雨の花　扇雲

左　経信卿の詩の稲系おとつれて春雨
ふる雨のさまこゝろ此作者の体こゝろ
体ふるこゝろ右の程度の義ふかくいてゝ
あやふふ三体の一つ体を得ふる目も
なもこゝ体こゝ定むべし

五番　鶯

左　勝

甲なるすゝ少つも森鳥の鶯ふる　琴風

右

聲原　鶯ふる　草系　佑荷

左は鶯の声を形容せられしなかの野辺の秋
野守さいめて感情有右は家々の家々繁
見えるかの桂左さこそ侍をらめ侍り

六番　詢遠

左

照月の面色こそ侍しかし　詢遠　調柳

右　勝

まことに清秋の月中ふ詢遠　土高

左の歌の五文字上の二句さ能とりあひたる姿さこそ
詢遠の歌さ向て八上の二句詢遠ふ〳〵ても以のさも
くとこゆかしきを右は志ゝつ巣ふ風と示をりの

左すゑのさ風こそ宮殿侍ふ

七番　薄

左　持

を色すゝき誰ら押ふて霜ー踏ら　松涛

右

松ふの色こそ侍〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵薄　仙化

左右共さ経ふ〳〵持〳〵ふ

八番　女蟲

左　持

[illegible]　　拳白

右

外様手足曳　うめぶ　[illegible]　泣石

左の焼くくいを[illegible]立てまの[illegible]たみいをふるゆも
なるゝ右ハ井特友都ゝ[illegible]足曳くさ[illegible]すと
いひりるを都人[illegible]口ヲ唱ゝ[illegible]東の[illegible]ハ咲
えも及ゝあ[illegible]ゝ[illegible]家の[illegible]類[illegible]左右
[illegible]に[illegible]作特[illegible]

九番　菓

左　特

菓の[illegible]ふ草の[illegible]　文鱗

右

[illegible]　旭　[illegible]ふ野菓ふ　石ふ

菓野[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]特[illegible]

十番　菌

左　勝

虹[illegible]跡を尋ふ菌ふ　勇招

右

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

左を[illegible]温をふく[illegible]菌ふ

右ハ茸狩山家の苔うす切も仍左を持とす

十一番　秋寂

左　持

秋ハ只うす紅の海の日暮かな　一排

右

秋有て誰か言を写池の亀　不卜

秋の長天と共に一色と三尺の童子ら蓋量をふるい一も日なりとハ思いいとこの侍又池の亀の万葉の後迄も不易の形体也もも目出度作言ともかもとこそ特とこそ筆をとる侍りし

洛陽　湖春書

此評ハ十番迄ハ十二番ハ古本にも見ず

一番　落葉

左　持

落葉ふるあの木の笠さまくらふるあらし　風雪

右

落葉ふるとて不二の降ぬ塔一川　松濤

[illegible]

左の句景氣微細にて流を付けり右又
山もおもしろかるべしこの詠一句の出来ものかな
にて冥々付ふと見せ句中眼にて見えるべふ
切字ハ――とゝ云ハ――切字を初字加
てゝとゝやとゝ切ふ故おもしろを難して持ち定
付べきハ

二番　霜

左　勝

親と子の霜枯をかこふ野辺哉　流石

右

霜ハ――あふきをかこふ枯の舟　勇招

この詠ハ――の詠すべしも言ふべきや歟

子を思ふと流ハ――出ふ付て野辺の子
を思ふ――ふさ句つゝ右の句さもあるべきハ左
句秀逸おもしろ中にて付しかし

三番　夜興

左　持

わの松にて月枯ゝ枯興　工高

右

ツもを狸得矢覆ゝ太もハ――　文鼠

左の句茂を作ゝ句ハ特人の取客ハふしかし和
なり右の句姿ゝ句ゝ句ゝに冥々付を出
を得矢ゝ――仍て持ゝ

四番　枯野

左　勝

板苗も枯野の目にあらぬ　松風

右

石橋をかも野を渡せる八日すれ　全峯

左の句末枯の咲そめて苗板のうらうらと靡る
野のおとり目ふるに川面をこのこす松虹梁の
姿をふるるて一句の文言　右も又枯野の風
景見捨がたく侍

五番　細代

左　持

子を連こそ板の細代子養枝　仙子

右

細代末の中ふき止ふる水の郷　不角

細代の床子を連ふる作兵衛こそ
かなし　右ハ細代の板の氷子安て寒そ弥栄
ふる色左右難ふかし

六番　石蕗

左　勝

破もてふの石蕗と鳥出ル籠ふる　調柳

右

石蕗さく中　雁も曳行く雲車の跡　立花

左の句はいとおもしろく京方を見おこせるふるさとをいとしたのもの薄も思出てもてをうらくなる
かり曳行く雲車の句意出ると不宜仍以
左為勝

七番　鶯

左　勝

鶯の聲ふり渡る月ぞ雪　嵐雪

右

鶯ぞなく若草を干牧の塩竈うれ　魚兒

鶯の声ふり渡る秀句限れ一句ぞ

かりそめ家ぞの春色ふり渡る秋の歌
をぞ千年をえ六月廿四日の日毛ぞ
ぬるるも右の句も蛮何とぞ結ぶ
ぬるるも
ぬ春ぞ春ぞ鶯の声句調る
出とも中ぞん

八番　氷柱

左

氷ぞ春ぞ作ぞ長毋ぞ柳ぞれ　一掛

右　勝

門ぞ春ぞ宗居をぞ春ぞ氷柱　琴風

氷柱ぞ春ぞ柳ぞのぞれぞ春色ぞ

ひとり哀傷の涙を右に拭ひ煙りの立ちまさるに世津の
の名は永柱の門を閉ぢる家居の扉感情
陶然たる面影や〜〜に覚ゆる

九番　霞

左　持

あらつきの何毛の手をの伝ふ舟　李下

右

表に霞く野辺の春迎あまたうれ　伸風

梨園寒威境の霞覚えの誠に出るとかく
さまは世を何毛降るれと呼声霞〜〜きき
右は又初るの霞を経るるを叶ふ

写所見る石師曠の耳をたてて離婁の
眼のさやかなるを共左右の是非辨ずる
事何〜〜

十番　神楽

左　勝

法神楽中〜を奏清士ふ和ある　去来

右

鈴鹿の文海〜〜野ふ神楽　孤屋

左の句さる雅もなく素〜〜ふ和も見えず
右は〜〜呼神楽中〜ふ面〜事
川〜右〜雅ふを〜て左方勝ふ

十一番　頭巾

左　勝

山里や頭巾とるべき人もなし　京　觀水

右

頭巾すべき出家見てゐる野中哉　嵐吉

眼さへ出家山中の客ゝ誘さそはれ　桃林

桃林云ふ右は眼さへ出て侍る野の法師人さへ思ひ思ひ白ゝ頭巾とる

十二番　十夕掃

左

何方へ行ゝ掃ゝ捨ゝ　十夕掃　峯白

右　勝

ゝ掃ゝ寺は目出度仏ゝ　不卜

十夕掃の日の捨ゝ掃を使ゝ捨ゝ　右は寺の十夕掃も思ひ出ゝ多ゝ先孤重ゝ

両句滑稽の誠をゝ掃ゝ感心わきかゝ

ゝ目出度仏ゝ句の心ゝ

一柳軒不卜曰　八身を塵境に陶ひ七夕ゝ志ハ雲井の山の心ゝ根を尋ゝ

ゝ芳野の花ゝ笑を

ゝ湖水の月ゝ琵琶を浮ゝ

ゝ風雅の切ゝ

ゝ事ゝ年ゝ集ゝ

ゝ再

ゝ及ゝ

ゝ春秋ゝ雲ゝ雨ゝ

東離の菜も名をさゝげて唐朝の牡丹もむ
さぶらを見て梅の俤さゝの奥も折て ふる
時て多のつを句も示人を驚るゝ むれ年生
き株て入ゝの花の香のゝゝ日ほき色こゝ本の葉
を拾ひゝの左右てわゝのゝゝ積て四節ゝ多
判士ゝゝりて色赤も其一て土てかふ法こゝ楽ふ
ゝゝふこゝの笛を益むて似多りゝゝんゝも出
青驚の目をめいあふむの口を戸さんゝ事ほさん
貞享卯年筆を江上の閑て濯ゝ終て
蕉庵雪夜のゝゝ灯ゝゝみ對を

拠書書

調和

時入相のまゝのゝを見すふ柳ふ

場 数の一重て業子何ふ家 不卜

自 陽ゝの市て蹴(ケ)鞠の一ゝ色ゝ 拳白

他 ふゝを小唄て母をふゝも 不角

鶴 三日月の九ゝ多るゝて草ゝゝ 渓石

將 雪薄ゝ松ハ土ゝゝ舟の火 魚招

高 足ふゝ破ゝの寺あゝ色ゝ 卜

自 笠て葎の実を踏ゝゝ

和

他 大内のすゝ掃役の以ゝ　角

代ヨリ出ル 自 森もちぬ紫を摩く衣多てふ　白

自 面の月も清の小陽女とゝ　招

その以陰をてふ火滅の屑　石

中陰を程ある苔のわすれ草　和

あゝ面の牧居て乳あふ兒　卜

一度ハおもひ治人七面　白

今年ちゝりハ吉京の城　角

いつの苔いつの月松を盟りて　石

蘇見ゝ中てハ醒ぬ夜の香　招

いつも書紬とめてらり惜しき　卜

目出度とあふ殿の仲人　和

篠原係く宮居桂皮て菖あえて　角

京を半て二藍の俺　白

幌ふてらふ森安氷室寺　招

陸とゝ冬を立丁余の道　石

あさ白を根ふゝ送ふ暁出さ　和

若元喪を張て寄て日雲る日　角

晨明ハ入色ゝの鐘ハ根ふ一　白

わゝしの陰ハ須ゝ ゝゝゝ　卜

黒駒の古巣知一出ル波清ふ　石

ナ一程ふ ゝ ゝ 拾一　拾

死ゝゝ僧の いゝりの淋中ゆ　角

陣陽の笹外ふ野辺の笠ふ　知

立ふゝ羽を集一ふ雉の声　卜

油ハふゝゝ清ふ ゝ ふ一　白

茅人ハ苗賣ゝゝ今一の山　拾

雪のふゝむ京の草鞋　石

。

撞ゝ釣鐘のゝふ尾上ふ　文磨

春日ハ草ハ萌ふ野の子　拳白

鶏実の籾の雫ハ新めゝて　不卜

岩のゝゝゝ見ゆふ鶯の巣　渓石

月のいふ秋の浪のこゝと　松濤

慕ふのゝふゝふの虚家　丸

古歌の末を思ひ城ゝゝ秋の旅　白

雲を見る人の心　卜
猫のやう甲斐の長吏の契り　石
ちゝきの名ある草の外ろん　清
艾葉（アヲバ）麺（ナシ）もちもち　九
裏（ウチ）山　白
奥ゝさほとの　白
かゝるわ人　卜
麋（メシカ）　石
鹿（オシカ）の常平　清
鶯の鳴く里　九

芸をとゝ根ゝ　白
書ゝ　清
夕ゝ　九
下戸の酒　卜
聟二人　石
山　白
歌　卜
思ひ　清
嬶　石

因獄おく日い盃の黄昏　九

を食ともせいこのゝぬ月の影　白

芝見すゝれ〳〵下京の秋　卜

おれ〳〵野ゝ董土筆と並居ゝ　石

蝶ゝ土ゝゝゝかもいの子　清

寺の垣も所のうさゝるゝ源氏武者　九

樹をめゝゝ櫂ゝ指ゝし　白

真間寺ゝゝゝの破をゝゝ経を　卜

指女のゝめゝゝ家指ぬ世ゝ　石

青秋もおれ〳〵泪の涙の色　清

鏡い老をゝゝぬゝこゝゝ　筆

。

面の青色〳〵ゝ穿柳ゝれ　蚕山

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ正月の雲　不角

青苔の精ゝゝゝゝ野をゝめて　一狀

清ゝゝ蝶のゝゝ飛〳〵れり　以喉

晨明のゝゝ程暑を細代笠　扇雪

ゝく見おゝゝ京の節木　琴風

意はそふ泪は雪のきえつゝて　不卜
名をあらそふ住倶城の菴　山
折もてあふ菊さしぬる家こ　角
不破をとゝ見て雲も黒髪　排
元人を遣戸に送ふ秋の暮　喉
月は一のゝ常の米賣　雪
そ一ゝ名ゝ武帝帳の外つ足もとて　風
桂耳もちゝ雷のとゝ仏を　卜
糸宿の水揮にそゝふ菅菖　排

奉加にそふ餓鬼僧ら奉
三ゝ迄位徳ゝふ子の別　喉
奈所ゝり音のゝゝ雛鳩　角
沼ぬ程足跡のふき嵐山家の雪　山
角を笑ゝて見遣ふ麻　雪
漫ぬ塞をゝ年も奈乃羊ゝ　風
ゝ見ゝ生ゝて土を埜家　卜
半月を賞ふゝいゝふ都人　排
知ふゝ暮ゝ豊の世間　喉
角

傾走る馬の足　山
去のふるもの　畳の衣　卜
山路を　雨　風
屋根の時雨　主の行　雪
負ふ人の旧　琴ふ月　桃
佛を濡す　盃の白　山
人知の庭の色　雨　角
入日の鐘の　つむ　風
遠ふ夕を　雪

僧の川　ふ　兒の影　喉
茶見を　猪の　程の　卜
都の　の京の青柳の菴　筆
。

明星や　猪　多　山　其角
海　の　月の陽　炎　峡水
立雉の跡　入ふ　の縄解　琴風
おのゝ嘘の　を　丈　扇雪
水　厠の下　行　卜

涼しさや手洗ひ水に月の影　一排

旅衣集めおくれば弱るなり　水

佐渡おもあれば赤蜻蛉の友　角

盥の妻逃げあるべしと世ふ　雪

田植を主ふ人の妻　風

呆吉る影ふ影る竈の催し　排

人の細ひ手にお洗ひ　番　卜

水雲の僧を導ふ法ひつく　角

いさあるを見れば男中の庵　水

紫の糟ひも軒の月　風

ひ〳〵るふ墻の百瓢　雪

花ふ〳〵ぬ盲醫の才を伝ふ　卜

ふふの朝ふを舎利唱ふふ　排

山城の小便賞もおしるの之　水

雪見ひ出ひく紋の傘　角

友ひふふ〳〵草を尋ね　雪

菴をふの茶の陽ふ加ふ　風

おー暗の卵わふ音ふつふ　排

手を祭ゆふべの明不の　卜

高人の夫の宮を祝せん　角

夫婦の上戸和　さるまい　水

狂言作る名い　婀まを　風

いとひもさ陸草の寮　雪

月出て責る見んとさふん　卜

奉幣の後菓のらい　榊

にて祐子楠葉野のあさ保　角

ひさ高の伽と知り　水

菓子菓のる結鳥の四あを　風

屋取久しさ國府の陸諸代　雪

真人のからい音花の外　榊

寒ひさふ水の名所　卜

追加

赤榊美ゆさ榊榊あ和　不卜

羽を白ひあさ榊の集り　琴風

白鳥の海ら出宗あふ辺を似て　其角

酒をもてなす樽の三階　卜

昨日又師走の月のおしさの　風

雨吟しやく弱をまつ　角

うもう廣くを下て越ふしうつの山　卜

雪隠とんせし板　蕣の軒　風

銘をきふ樽の鉦鼓の音ふりて　角

蜜の奉加て松魚とふこま　卜

時きくの祭の芋茎吹ふ　風

あすは鏡て顔をれくさむ　角

加賀発句一但の数て泣ちしを

志ハの窓て梓をやしふ　卜　風

指をきぬ格子の親の恐ふしん　角

かきくれ蔵ふの器の麦　卜

月花の境をふふ影の名事　風

暑の秋保文察合の僧　角

義ふふ鞠の女の魚をまひ　卜

蠅て板屋住ふ男の寂文　風

夕立を恥しうぬ吉原　角

陸奥の早歌神〳〵ゆるす　卜

佐鯉の庵にやすらと望むらん　風

大根あをきふる畑の見渡し　角

皆黄ばみ何をかすかむ雪の舟　卜

足袋はいとゞ冥ふる妻　風

色ぬる聖に紅をまかせより　角

毛の男ふ日い猫のまふふ　卜

世の月を義経に飽き飽き　風

俳諧の京猫と猫ふ移り　角

中〳〵毛猫をかく児の赤〳〵迄

外牡の里ふ北の遠姐　風

男碗猫に京保〳〵を傾きて　角

既に〳〵多川宵の盃　卜

佐野多九〳〵の御影の花衣　風

西上　ものふふ雲　巧吹　角

都々文の原

春

そのうちにけふのうちもまたのよ　　巣兆

梅くしや附るし衣をもるゝ雲　　不外

梅のくれ宮あたりはあかきの雨　　谷?

松と見る常の旭と共にあり　　不角

来るに秋もかけて聞しの雨　　白村

吉沢の芹八か月の匂ひ哉　　工鳥

冬三ヘ

宮ちかく引も引くの霞　　浮雨

紫も早文ふき所鶯の郷　　景道

夏二ヘ

松しめやもう船かけさく　　永来

出るや野をも霞若菜哉　　文子

杉かげや春の花かな　　日人

花の中も黄なるや上野かな　　調柳

東風かく緑の任遠張哉　　て二

月のくもる梅の花喰ふ鶯哉　　松濤

散ぬるも見る椿かな　　浩蓬

霞ぬと芝ぞ見えつる雪間哉　　峯白

春澗

竹の香や柳を尋ね藤のもと　　其角

おもひ出て髪ゆふてしまき柳かな　　文丸

青柳のたれて星のまたゝきに　　一芋

風ふくもむらさき岸の柳哉　　勇招

角田川にて

不卜
調義
立竿
比竹
溪石
調物
扇雪
重元
拳石

一挑
不角
不卜
由之
一挑
琴風
蚊足
不角
味多

山吹や秋の雫こぼす四十雀　文鳥

宗の花の芳しさを伝ふ　宇宙

垣の梔張り立て盛りの姿　蚕山

鶯のさぶらふ板に干す紫　長角

梔の日や女侍の洗ひ髪　琴風

手ぶら提げ二月三日を雛の市　湖柳

忘れ貝八懐炉あるのとすれば　立巷

汲て呑む手に金ぶらぶら春の雨　不角

ほろほろと赤の仕業ぶり　李下

ほろほろこの家の数寄者の数寄者羽織　三園

山皆自得

花の木ばかり蚕ばかりひろ友さまの　芭蕉

月後巷影上探干

月影のひとと植の中ふ梅の邪　不卜

弱ふ〳〵続て おこ蓮も梅　文鳥

山さくら住を佛とふ多り式　蚕山

鶯の言ふ八ふ〳〵ぬ梅の邪　湖石

ふ梅 風ホカ 雲の雲の傳ふ　一哺

見らるゝ也 折ふさぬ山櫻　琴風

さくらも散も一末はゝそ山さくら　峯白

立寄る寺の名をきく櫻哉　調柳

常住の鞠見る寺の櫻哉　廉吉

蕊ヲ八ひらの梅ふさくる守　梅雀

行隙もなかいなる櫻哉　湖舟

憂ヲ忘ヲ生ふこ家はなめ　調味

彩雲の僊ーき峯のもゝひゝ哉　曲之

ふもゝ梅ヲ孫喜のせいーはを　湖舟

やきーさ燒地ヲ家くはゝ式　三星

菴ヲ也ー峯ヲ八時を白はゝー　徳乙

雲

[illegible]

三月廿日　しこ

陸光別家苦吟身　徳保

大酒ヲ起ヲ夢の憂　雅ヲ風　真角

根八只ヲ芦葉ヲり上を牡丹　拳白

象亭を乗ヲ

紅点の二葉ヲ見ーー男　徳　佃柳

啼まてこ狩子落しけり不如帰　三翁

卯月とや雛の声しの花曇　沾蓮

顔拭し菖蒲かおりや杉の影　立些

猿草さそく女の早苗かな　調味

返す袖香やふるゝ水ちよ海かな　徊義

子を負てまゝ婦休める田植かな　㵎石

照高の中にて降る五月雨　和水

見ぬ人をまつ傾きの早百合かな　朱絃

わすれてかは夜の蛍かな　老麿

草の根ゆ蛍の出ぬ小雨かな　雨国

花藻とてつも推実の手なりけり　一眺

鴨の巣に青芦あをし小雨かな　、

すゞしさも人は寝て水好きかな　湖舟

青鷺二尺あまり木毛せゝの音　不角

寄手や松も柱にせゝの声　梅雀

思ひあかし蛸一声麦の中　雨国

松陰は一葉に音を涼しき風　蚕山

幸涼しき書を二つの勤めけり　琴風

吉原は秋千寺もぬ涼しうて　由之

扇しる鐘の尺見るまゝに　仲風

帳面て能陸見うる涼しさ　兼吉

夕涼し鞠を見まゝる小兵　峨眉

身を安く蚊を忘れる涼しうて　扇雪

百八(ナイタシ)の声て響くまゝかな　文子

涼しさは子孫迄小兵うて　不卜

月川道しる指る清水哉　松傍

川の夕しも日影を走る松魚愛　不詠

川ひしる秋しる連川うら八夏　兼吉

畳鳥て栄鳩涼む長しり　芭蕉

風一つ外て欲るを子供うて　不詠

涼しるる風の水て冴ちる

猛蓮の表を去る真楽うて　不角

常夏を見も羽徹の暑ぶ　三園

涼しも夏の真昼のかゑの恵　工兵

夕立ヨ尾上の寺ハ俗うて　琴風

夕立て蓑面の滝を濡て見　涼石

夕立すぎぬるの賞ふ舎する　不卜

秋

六日の衣続えしゆ　女七夕　不角

七夕を法師の鳥ふ男ひ法師　扇雪

傘工の日和を星の手向する　沖石

扇出ふ幸星の別れ　琴風

代士のそそかを安ず相撲る　不卜

そそ衣の結ふ縋ゆ角力　其角

法師鳥ゆおしの君ふそそ　支磨

新鳥の蔓ふ手をそふ蕎麦　古川

帆柱ふ雉這ふ子後ふゆ　佃柳

雉の白い茶を春ふ陳る　立堂

法師鳥ふ小尻の蕎麦ふ　梅雀

雉ゆそそ蛇嫁ふそ後後ふ　佃義

ふる蕎を麦八杉接ふ春ふ行く　雲濤

ふそ春の晩日おそ後く対竜弓　比竹

品川を船そそ氣ふ稲の花　味丸

琴風　夕口　不卜　伸風　鵜白　扇雪　不角　立雲

一雅　不卜　夕口　蚕山　三羽　文子　拳白　調柳　不角

冬

玉あられ飛や蛇籠の瀬の上　江戸 玉光

暁の星を逃行あられ哉　勇招

えりくり目もつくしや玉の村すゝめかな　桂山

女とてもしらぬ男の時雨かな　文子

いつのまや虹のみえてしぐれけり　十一月

蔦枯て壁をめぐる庵哉　琴風

[illegible]

見ニ来ても落葉を梅の陰かな　沾蓬

吹よせし水と松しまの月の下　斗入

落葉して世に隠逸の菴も流し　調味

わらの長さ手とく猫ふ文よむ哉　不角

風のさゝ寺月のさかりかな　柳車

鳥落て精の声寒き芦哉　立志

聖ハ三里あれより出ぬ龍涎かな　白揚

霜の鐘夜奥の犬の呼かな

杜宇を訪ひけるふたりなりけり　工斎

夜着一つ見に干ても色しいとし蛼　芭蕉

湾中も夜着く気を向ふ枕の御手　戈九

竹の葉ふの霰にすゝむ夢見風哉　渭石

川越もいゝるの尾を立く氷柱かな　琴風

帚ふ日ハ氷柱を（　）にて見ゝ鳥　渭石

帆柱の水松見えそめる　沾角

雪をまつ後の雪のあしたかな　芭蕉

まつ雪やいつ梅ありて夕ぐれ　其角

草の戸や傘さすやうな雪の暮　拳白

垣越に児と雪くり法師かな　嵐雪

漂ふや夕ぐれ早し千鳥なく　一桃

芭蕉庵にて

菜畑に蝶もむくるる夕べかな　不卜

梅ちるや鶯の音　立圃

香のかくれて梅に負ぬやうなる　延水

蛛の糸ゆるく春風吹ぬ　沾山

年ゝに梅さく園にかくれ　梅雀

行年の紅に染しくれなゐ　竹山

わらの貧を養ふもあり年の暮　扇雪

坐右銘

行年や墨にて取ふる書　其角

貞享二丁卯年梓行

文政二己卯年九月再梓

江戸　橋梁　雄嶺

笑沢　晩室　乗峯

嵐高　柳々

都て茶の系は貞享二年丁卯の春の撰集にて其風体の繁多なるを一つ龍の茶の板にて今少標題の孤立して伺あるに写却して賞事なきにしかしなれども茶の山路氏霞峯の伝世の手撰よりの写にて一集あり大に所々不卜雲の撰たる都て茶の

系ものを昔を見てふ志の学柳
いとめてふるゝ板にのほせ世とくふ
羅岑も亦志のなきをふかくけるら
ゝまし時を待ちて此巻の書かゝし
文政二卯のゝ手搖梁確嶺山いとゝ羽ふ
節を曳の幸をとゝろ此岑と此集を
嶺と傳る嶺得て曰瓊玉を淀の蒸術
とかくに似ゝむとて奥の巻有
彩生侍ゝ写取を捧ゝりふ面よ

山道の墓むゝ家世を踏ものを
おて仰ゝ知人百巻の石生し
ゝ百巻の往昔と達ふの今ゝ
羅岑柳ゝ保ゝ行ゝ此確嶺ゝ道を
志ゝ比不卜世の意を讀ゝ伊ゝ
切ゝ古ゝ居を瀧ゝ瀧ゝ瓶ハ集め
再生の大道ゝ人ゝ有ゝ
山ゝを平ゝ業ゝ世ゝ
あゝかゝの古堀ゝ彩ゝ生ゝ其業の

渋谷
五年
藏

昭和女子大短大
第 6397 号
受入
36. 3. 14